

# 実習を振り返って

応用言語学講座・博士課程後期3年

高橋暦

## 1. 実習全体

例年とは異なり、実習期間が春季のみに一本化され、またこれに伴って、実習参加者の数も多かったため、実習生同士の横の繋がりを、より強く意識する必要のあった教育実習だったのではないかと思われる。

実習生の数が多いということには、「実習全体が華やかになる」「よりバラエティに富んだ授業を行うことができる」などのメリットだけでなく、「全員の都合を合わせるのが難しい」「意見に偏りが現れやすい」「引継ぎが正確になされない」などのデメリットもまた想定される。事実、本実習においても、こうした両面の影響が実習に及んでいた。とくに引継ぎなどに関わるデメリットは、特別活動の反省にもつながった点である。

しかしながら、実習全体を通してみれば、日々切磋琢磨する中で芽生えた〈横の繋がり〉という共有意識によって、皆、高い士気を保ちながら、最後までチーム一丸となって実習を終えることができた。

## 2. 反省点

「チーム・ティーチング」という形態には、多くのことを学んだ。たとえば、各日の授業においては、「実習生2名+TA1名」という単位ではチーム・ティーチングを意識できたが、チーム間での連携には、あまり意識が働かなかった。実習報告を読むだけでなく、少なくとも、自身の担当日の前日授業には、見学に行ったり学習者の様子を聞いたりするなどの準備が必要だったように思う。

このことは、特別活動（発表活動）にも言える。自分たちのチーム以外が、どのように特別活動の授業を行っているのかを特に確認もしないまま、自身の教案を作成し、授業を行ったため、6日間というまとまった活動があまり意味をなさないまま、活動を終えることになってしまった。（実習終了後、振り返りにおいて、実習生全員で改めて立てた授業デザインは、反省点やここから生じた課題をもとに練ったものであるため、実際に授業として行ってみたいと感じられるレベルのものとして仕上がった）

その他の反省点としては、個人的なことになるが、本実習では、実習生8名のうち、自身が最高学年であったこともあり、他の実習生にいろいろと気を遣わせてしまった場面があったのではないかという点がある。たとえば、話し合いが進展しない、難航するといった場面では、自らの意見を声高に主張し過ぎてしまったことも多々あった。いくら同じ実習生であっても、いったん実習から離れてしまえば、研究室の先輩と後輩である。後輩である彼女たちの気持ちを、先輩である自分自身が、慮るような余裕がほしかった。お互いの立場の違いという点から感じたチーム・ティーチングの難しさである。

## 3. 今後の課題

初めての教壇経験は、一言で言って「おもしろい」ものだった。反省点も課題も、山ほど残ったというのに、今このレポートを書いている思い起こされるものは、ほとんどいい思い出しかない。幸せなことである。しかしながら、今後、日本語教育も将来の仕事のひとつとして念頭に置いている身としては、その反省点や課題に目から目を背けるわけにもいかない。むしろ、これからの人生は、これらの課題こそが重要であるといっても過言ではない。ひとつひとつを吟味して、自分自身、納得と満足のある答えを見つけてゆきたいと思う。